



□ 平成29年度 秋田県自作視聴覚教材交流発表会

! 特集のため紙面構成変更

□ いきいき健康長寿講座

□ 八橋人形伝承館

秋田県生涯学習センター(編集:社会教育アドバイザー)

平成29年度(第67回)

秋田県自作視聴覚教材交流発表会

平成30年2月22日 会場 秋田県生涯学習センター

本交流発表会は、学習の場で役立つ視聴覚教材の自作活動を促進するため毎年開催されています。67回目となる今回は、幅広い年齢層から3部門9作品(小学校4、中学校1、社会教育4)のエントリーがあり、制作者や見学者、社会教育関係者など37人が参加しました。

作品は、地域文化、自然観察、自由研究など多様な分野にわたり、それぞれの映像や記録には実際の学習の場で役立つような創意工夫がみられるなど、どの作品にも制作者の熱い思いが随所に感じられました。閉会行事では、最優秀賞1作品、優秀賞8作品が表彰されました。

なお、出品作品は、当センターにて視聴、貸し出しができますのでご活用ください。

おめでとうございます

最優秀賞



なまはげの里から 男鹿のうみうしⅢ
ー自由研究、うみうしはなぜ巻き貝ー

秋田大学教育文化学部3年生
天野大助さん

(平成30年度全国自作視聴覚教材コンクールへ推薦)

優秀賞



「ことしもやって来たサケとオジロワシ」

大仙市立神岡小学校学校支援地域本部

佐々木昭元、鈴木三郎さん



「レッツチャレンジ ビブリオバトル」

横手市立朝倉小学校6年生

佐藤遥斗さん



「創作劇 銭掛桜」

横手市立朝倉小学校6年生

藤谷空翔さん



「光の色できゅうりの長さはわかる？」

湯沢市立雄勝小学校3年生

加藤 慶さん



「平成28年度 小坂中学校PV」

鹿角市立花輪第二中学校教諭

佐藤脩平さん



「割箸書画入門」

秋田市

齊藤心葉さん



「能恵姫」

メディアバンクみるわーく

中川文子さん



「土館の念仏講」

メディアバンクみるわーく

小野まさるさん

県民総「行動人」推進事業
行動人自主企画講座

いきいき健康長寿をめざして

ボランティアコーディネーター「のぞみ」

いきいき講座Ⅱ



ボランティアコーディネーター「のぞみ」主催の「いきいき講座Ⅱ」が、3月3日当センターで行われ44名が参加しました。

当日は、海風久美子さんの代表挨拶に続き、講師の太田敦子さんによる「いきいき健康長寿をめざして」の講話があり、「健康長寿4つの予防」を中心にしたユーモアたっぷりのお話がありました。特に、読み書きを楽しみながらの「考える脳トレ」や椅子に座って筋力アップする「生き生き百歳体操」の実技では、和気あいあいの雰囲気の中で、参加者の顔も自然にほころびました。

虹さんぽ

200年以上の歴史『八橋人形』に魅せられて

第40回秋田市工芸品まつり

(秋田市にぎわい交流館AU)

3月7日、秋田市工芸品まつりで八橋人形が展示されていました。八橋人形は、粘土を型抜きして焼き、顔料で絵付けした土人形で、重厚な土の感触と素朴な色合いが特色です。

江戸時代から200年以上も引き継がれてきた八橋人形ですが、地元の菅原神社祭典の天神人形は「八橋のおでんつあん(天神様)」と呼ばれ、長く庶民の生活に寄り添いながら息づいてきました。

平成26年最後の職人道川トモさんの他界後、「八橋人形伝承の会」が、制作活動や展示、体験教室等でその伝統を引き継いでいます。



ミニセミナー

第32回秋田県教育研究発表会

平成30年2月8～9日

秋田県総合教育センター

(当センター川田貴之社会教育主事の研究発表の概要を紹介します。)

生涯学習講座をプラットフォームとした高等学校における地域学校協働の在り方に関する一考察
ー あきたスマートカレッジにおける実践事例からの提案 ー

仮説

サーヴィスラーニング理論に基づく高校生参加の生涯学習講座は、知のOutput経験を可能にし、地域学校協働活動のモデルの一つとなるのではないかと。

検証

高校生が、日常の学習活動や部活動などの成果を県民に対してOutputできる生涯学習講座を実施。(実践事例3例)



異世代交流の講座を通して、高校生は生涯学習への意欲と学習成果を地域で生かそうとする意識を高めることができた。

結論

あきたスマートカレッジの生涯学習講座は、高等学校における地域学校協働活動を視野に入れた学びの一つとして提案できる。

七色

平昌冬季五輪は、日本の選手指導の現状に改めて目を向ける機会となりました▼かつて、日本の指導現場では、指導者の経験知(価値観や練習方法等)を選手側で察する必要がありました。しかし、昨今は、選手とコーチングスタッフが科学的根拠に基づいて、心理学的な手法を駆使するコーチングが一般的です▼そこで行われているのは、選手自身による内発的動機付けを促すための解決志向アプローチ(solution focused approach)です。前提となる発想は「変化は絶えず起こっており、そして必然である」、「小さな変化は、大きな変化を生み出す」、「解決について知る方が、問題と原因の把握より有用である」というものです。具体的には、解決方法を探り出す対話(dialogue)と最善の選択肢を絞り込む討論(discussion)を選手が納得するまで繰り返します。答えはいつでも選手側にあります▼「勁(つよ)さは厳しさに裏打ちされ、厳しさはやさしさに裏打ちされ、やさしさはただしさに裏打ちされていなければならない」(立原正秋)。強さ、厳しさ、優しさ、正しさを兼ね備えた「チーム日本」だったのでですね。